

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十八年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十二巻第十号（通巻第一四二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第142号

2. 2006

# 銀 髪

品川 鈴子

銀髪を母かと思ふ初鏡

ひとり分姥の屠蘇とす「美少年」

ぼつぺんの吸ひ口に紅灰かなる

ぼつぺんの息継ぎ「お力<sup>\*</sup>」<sub>りき</sub> さながらに

\*「葉」に「りえ」



意に副そはぬ春着の帯の締めごこち

歯を診らる春着の口を開けしまま

歯科台に仰ぎよう臥が春着の帯枕

春着の眉しかめ奥歯の荒治療

鏡餅人の字型に罅生じ

「灯ひ咲さかか爺じい」電球撒きし枯並木



# 第十回ぐろっけ賞発表表

受賞作品

俳句の部

藪の視点

田口たつお

垂れ下がるホースを銜へ春水  
猫抱かれ巷の恋にかかはらず  
容赦なく巢燕白きもの落とす  
若竹のどれも親より幹太に  
もつれずに葉と葉きりあふ青芒  
油蝉ぢりぢりぬざり幹裏へ  
秋のこゑ聞かむと谷へ石抛る

受賞作品

俳句の部

駿河湾

森 早和世

今朝秋の靴へするりと納まれり  
酔芙蓉ま昼は留守の家多き  
熱海へと集ひし後のころもがへ  
還暦の祝ひ兼ねたる月の宿  
秋扇を女に借りて舞ふ男  
月更けし信濃のひとと箸すすめ  
単線を遊んで帰る雪ぼたる

# 玉鈴

兵庫 水野範子

紅葉宿部屋の名総て木に縁ゆかり  
菊匂う同姓続く墓場まで  
親不知歯痛み忘るる紅葉径  
みむらさき義仲寺の池魚棲まず  
散紅葉芭蕉泊まりし無名庵

香川 三橋 早苗

炬開きの手にすっぽりと織部焼  
炭熾り茶釜しゅんしゅん独り言  
炬開きに数へて座る暈の目  
吊り柿に囲まれ爺の火照り顔  
愛称を客地でもらふ空つ風

和歌山 宮原利代

林檎剥く皮は切れずに螺旋にて  
爪先で登る石段紅葉寺  
紅葉山背負ひて立てり仁王像  
一步寄り二歩退りしき見る菊花展

# 吟

茨城 三輪 慶子

杖ついて母のおおまし秋の薔薇  
母白寿晴着の思案する小春  
揺れながら杖で指したる石路の花  
本殿へ荒き石段秋の水  
社務所には人影もなし秋の暮

愛媛 村上 和子

萩刈りて寺苑さくらに新の風通す  
認知症らし白昼に菊盗む  
老人のジーンズルック菊日和  
釣り人に湖芯ゆづらぬ鴨の陣  
始発バスたどる瀬戸内鯨日和

大阪 師岡 洋子

風の出ておどろき易き鹿の耳  
もう一度逢ひたき人の墓洗ふ  
竜胆の花折る雨にぬれながら  
手紙読むひととき秋日膝にくる  
亡き人の時計が動き秋深む

兵庫 八木柀一郎

電柱にいつか灯ともる稲架襖  
空にこころ委ねし一と日吊柿  
直立に倦みたる日々を冬芒  
玄関にへアピン一つ冬に入る  
晩年の最中にありぬ石路の花

東京 安田とし子

鯉の歯の見えしとおもふ水の冷  
たんねんに風鎮磨く文化の日  
重ね着の一枚脱ぎて空仰ぐ  
人去りて木椅子にのこる冬日向  
落葉浮く池は古鏡の暗さもち

香川 合川月林子

カーブするたびに濃くなる谿紅葉  
どの島も蜜柑が熟れて人住まず  
あるだけの筵を使ひ霜除す  
切り売りの大根を買ふ独りもの  
照り戻りはげしき日なり石路の黄に

大阪 赤木 真理

階上の子の飛びはねて賢治の忌  
針さしの綿ふつくらと冬麗  
冬シヨール懐古レトロ着物の今娘  
ピアス穴開ける相談栗しるこ  
一葉忌間口の狭き家に住み

兵庫 秋田 直己

萩風の触れて高野の道祖神  
紅葉山一雨ごとの照り翳ひびり  
方言の飛び交ふ里の秋祭り  
燈籠に灯し親日家を招く  
髪白き牧師の日課菊手入れ

愛媛 足利 罇子

枯蟻螂交じる狭庭の吹きだまり  
仰ぐ位置変へて眺める帰り花  
暁四時の狼煙に神輿宮入りす  
旧街道行来ゆきの寂れ紅葉散る  
捨て犬につきまとはれし紅葉狩

# 薬草歳時記

(一四一) ミツバ、ミツバセリ (三葉芹)  
菅原由紀

根三つ葉の根のきんぴらや春障子 永井 龍男

今年のひとときわ寒い冬の訪れに北国の料理をふと思う。かつて酒田出身の友人が作ってくれた納豆汁のことを：

納豆をまな板の上でトントンときざみ、すりばちに入れよく摺る。こんにやく、きのこ、豆腐を人れ、少々のみそで味を整える。最後に香りの良いセリをきざんで散らして完成。セリの香りが納豆のおいを消し、それはそれはとても美味しい。私はミツバセリはセリのことと思っていたが、ミツバ芹とミツバは同じもので、セリそのものとは違うようだ。

ミツバセリは北海道から沖縄まで広く分布、日本全土の山地の日陰などに自生する多年草。また野菜として独特な芳香が好まれ、食用にされる。

草丈30センチから60センチぐらい、茎は直立し分枝する。葉は3小葉からなり互生、小葉は卵形にとがる。夏には小枝の先に小さく白い花をつける。全草に精油を含む特有な

香りがある。

薬用部分は全草。消炎、解毒作用あり。

天然ものの方が香りが良く珍重されている。その香りは食欲を増進する。

胃もたれを解消、神経の興奮を鎮め、イライラを解消する。

貧血、疲労回復にも効果あり。

カリウム、カルシウム、鉄などのミネラルやビタミンが多い。

ミツバを食用にする習慣は欧米にはない。栽培して食べるのは日本と中国。

おひたし、汁の実、卵とじ、なべもの等に。秋の土瓶蒸し、ホイル焼き、新年のお雑煮等にも欠かせない食材。

この香りの良さは、子供の頃とても苦手なものだった。できれば食べたくなくて、つまみ出していたことを思い出す。

和名の三葉は、葉が3小葉からなることからついた。

我が国のミツバの軟化栽培は古く享保年間(一七一六～一七三五)に江戸(現在の葛飾区水元町)で行われていた。

参考文献 「牧野薬用植物大図鑑」 北隆社

「食の医学館」 小学館

著者略歴 神戸薬科大学卒

ミツバ (ミツバセリ) [ミツバ属] (せり科)

(三葉、三葉芹) *Cryptotaenia canadensis* DC.

(=*C. japonica* Hassk.)

薬用部分: 全草 (鴨兒芹 (オウジキン))

花期: 夏(5月末~7月)

花直径 約2mm

萼直径 約1mm

果実期: 夏(7月~9月)

果実 約5mm×1mm

新苗 (蔬菜): 早春~3月

草丈: 30~60cm

複数形花序

果実(種子)

須賀悦子画

根茎

三つ葉芹まじはり薄き齋の膳	有働 享	池田 かよ	ぐっけ
三葉芹浮かべて富めり輪島椀	佐野 美智	中嶋 秀子	橋 間石
黒土に三つ葉とびとび分教場	加倉井秋を	長谷川秋子	殿村菟絲子
三葉芹摘みその白き根を揃ふ	秋元不死男	石塚 友二	母の忌の目の中にほふ三葉芹
まこと三枚の葉こそ愛しきみつばかな	根三つ葉の屑も香に立ち夕厨	三つ葉提げて帰る清しさ人も見る	三つ葉噛んで光源氏に逢ひたしや
洗はれてガラスのごとき三葉芹	三つ葉	三つ葉	三つ葉



# 鈴の奏

品川鈴子選

細き杖芭蕉巡りし湖は秋  
芒叢揺らして発車有馬口  
兵庫 中尾 廣美

一葉を残して桐はバチカンに  
秋桜弁天町の裏長屋  
のれん干す湯屋の三階天高し  
兵庫 津田 霧笛

立冬の城の日時計陰にぶし  
おしどりの寄り合っている雌同士  
売られゆく我が家の庭に冬の薔薇  
逝く秋の重さを外すネツクレス  
兵庫 高橋 照葉

資料館短日刻む掛時計  
ボジョレヌーボーめつぼう詳しベレー帽  
尼寺の世帯めくなり掛大根  
白壁を越える榎檀や門跡寺  
兵庫 鈴木 愛子

さざ波の志賀に黄落皇子の墓  
雑魚を炊く堅田の老舗小春の日  
産土の森のさざめき神の旅  
尉火斗袋祝い着につけ秋うらら  
兵庫 大西 和子

湯豆腐に正座ゆるゆる崩しゆく  
さんざめく板戸一枚牡丹鍋  
梅擬生けて語部人を待ち  
体にも家計にも良い秋刀魚かな  
大坂 島本 知子

人参の甘さを知りし離乳食  
密室の家族見ている冬の蜘蛛  
暮早いいつもと違ふ郵便夫  
緋の傘に小鳥来てゐる野点かな  
東京 木野 裕美

木の実径幼なポケツト膨らませ  
二羽三羽雀翔たせて草紅葉  
降りかかる色葉も混じり路边高い  
大名も姫も闊歩の七五三  
兵庫 伊勢ただし

中世の血を見し要塞夕紅葉  
ポツダムの宮殿紅葉かつ散りて  
霧深きプラハの夜明け旅立ちぬ  
ヘルメット河原に転げ秋出水  
大坂 小菅美代子  
シスターも敬老会に招かれて

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 内藤三男 //

\* 選句は全て 品川鈴子

細き杖芭蕉巡りし湖は秋

中尾 廣美

松尾芭蕉は西行の足跡を慕って「奥の細道」行脚をしましたが、やがて晩年は悲運の武将木曾義仲に心酔したとか近江の義仲寺は、俳諧の縁も深く遺言によつて、義仲の傍らに葬られました。

琵琶湖のほとりを歩いた芭蕉の杖が残っていて目を惹く。それは小枝のままにやや曲がり、細い先がささくれて、生身の芭蕉に会うこちでした。また狭い寺領には私の連句師系「無名庵」もあります。

のれん干す湯屋の三階天高し

津田 霧笛

道後温泉には坊ちゃんも通った湯屋が、古めかしい木造の三階建てで今も変わらぬ客あしらい。最上階の窓を開け放し、秋晴れに老舗の暖簾を干しているのも、城下町のおっとりしたたたずまい。

尼寺の世帯めくなり掛大根

高橋 照葉

物音もしない尼寺は、聖域として俗世とは別世界のよう  
に思われるが、境内に掛け大根が干してある。綺麗ごとでは過ごせぬ自給自足の明け暮れに、庶民的な親しみを覚える風景である。

産土の森のさざめき神の旅

鈴木 愛子

生まれた土地の氏神様には愛着を感じる。久し振りに故郷の神社に参詣したところ、いつもは静かな森がざわめいている。そうだ、今は神無月で氏神は出雲へ旅されて留守なのだ。それで鎮守の森の樹々が羽を伸ばしてざわめいているのか。素直な描写で好感のもてる一句。

さんざめく板戸一枚牡丹鍋

大西 和子

丹波の猪肉料理屋を想像する。隣室とは板戸一枚で区切られていて、牡丹鍋を突ついている賑やかな声が筒抜けに聞こえてくる。産地の猪肉は格別にうまい。「さんざめく板戸一枚」で牡丹鍋を囲む楽しい雰囲気がよく描けた。冬の食の風物詩である。